

【組合員資格審査委員会構成】

去る、四月二十八日、六名の方が委員に委嘱され第一回の委員会が開催されました。

法律の改正により、毎年新旧に拘わらず組合員の資格審査が義務付けられました。

委員長 伊藤 正彦 (阿賀町綱木)
 副委員長 鹿島 武司 (新潟市江南区)
 *委員 立川小三郎 (阿賀町五十島)
 *委員 芳賀 大策 (五泉市中新)
 *委員 齊藤 等 (五泉市赤海)
 *委員 佐藤登志昭 (新潟市江南区)

《委員の皆様宜しく願います》
 (任期は三年/再任は妨げない)



悲願 40年ぶりの改良、今度は大丈夫か...

魚道改良へ道

〈事業概要〉
 国営阿賀野川用水土地改良事業により昭和三十年から五十八年度より整備され、用水の安定供給が図られてきた。しかしながら、供給開始から約四十年が経過しており施設の老朽化が著しく頭首工は、堤体下流の河床における局部的洗掘やアルカ

咲花頭首工改修工事着工

り性骨材反応による堰柱コンクリートの劣化等が顕著となっている。また、左記岸の水路にもコンクリートの劣化がみられることから、現実のものになるが、農業用水取水口の位置など、改良が不可能な箇所もあり手放しでは喜べないが、一定の評価は出来ると思う。

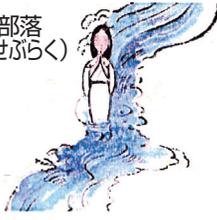
工期は二十年から二十三年度で左岸と右岸に分け行われる。

※専門工事事務所を五泉市南本町に設置し、この十一月頃から工事は本格化する。
 (総工事費二十億円)

昔、むかしの話

〈六野瀬部落の由来〉
 (阿賀野市/旧安田町)

六野瀬部落 (ろくのせぶらく)



(資料国土交通省北陸整備局より抜粋)

昔、阿賀野川は大変な暴れ川でした。毎年氾濫で家や田畑を流し村人を苦しめました。村人たちは土手を築いたり、神様に祈ったりしましたが氾濫は治まりませんでした。そこで遠く鎌倉の鶴ヶ岡八幡宮へ行き、「どうか氾濫がなくなりましよう」とお願いしました。すると人柱を川底に埋めてお祈りすれば、氾濫は治まると神のお告げがあった。村人はお金を出し合ひ、五泉から「おはき」という娘を連れてきました。

さて「おはき」は美しく利発な娘でしたが、村のためなら川底に沈められ工事が終わりました。

そうすると一晩のうちに川の中に六つの瀬かできて、川の流れが良くなり氾濫もなくなりました。「おはき」のお陰だと村の人たちは喜び、競ってそこへ移り住みました。六つの瀬ができたことから現在の「六野瀬」という集落が出来ました。

※阿賀野川の氾濫を止め、村をすくった「おはき」の霊は、今も安田の神社にまつられているそうです。

現場採卵/義務を果たしてこそ権利を!

阿賀野川水系さけます増殖協会の協議により20万粒の現場採卵を3年間試験的にを行い、その結果をみて今後の方向を探ることにしています。しかし昨年の採卵実績は約12万粒と下回り、受精率も65%と低調でした。

今年もこのような状況であれば、現場採卵は中止。全数ウライ漁となれば、義務と権利の原則から従事者のウライ漁経費の一部負担も考えられます。義務を果たして後世に貴重な資源を贈りましょう。

サケ・サクラ鱈のルアー釣りは、漁業組合員も禁止!

*さけますの漁具は阿賀野川水系さけます増殖協会と協議し、県知事から許可を受けるもので、さけますの漁具としては許可を戴いておりません。

*さけますを除く一般遊漁にはルアー釣りの制限はありませんが、さけますを誤って採捕した場合は、速やかに放流してください。



三川地区の取組から

*投稿(阿部 隆さん)

サクラ鱈ウライ漁、新谷川の使命!

近年「サクラ鱈」は幻の魚になってしまった。昭和三十年代までは春秋を通して荒瀬や淵などいたる所で捕れたが、四十二年八月の羽越水害で河川の災害復旧工事が行われ、両岸のプロック積みや床固め、それに加え、大規模頭首工。更にダム建設等で従来のように容易に魚が遡上出来なくなった。

特に、サクラ鱈は春の雪しろと同時に阿賀野川に遡上し夏を経て支流に入り秋十月に産卵する。孵化した稚魚はサケとは異なり一年間を川で過ごし二年目に降海する。降海せず川に残り陸風化するものは「ヤマメ」となり、ほとんどが雄で、翌年遡上するサクラ鱈と交配する。

天然産卵が好ましいが、近年の捕獲技術の進歩で絶滅寸前の状況である。

ちなみに、平成十八年の阿賀野川協会の採捕数は百一尾・十九年百二十一尾・二十年三百九十五尾である。新谷川のウライ漁は平成十三年から始め、観光築場対岸で行い、漁獲は僅か三十数尾であった。許可期間も当初は一月で、増水時など重機とは言え、撤去も大変でした。

又、サクラ鱈は濁らないうと支流に入らないので、そのタイミングや落葉、ゴミ除きも大変な作業であった。

阿賀野川から事業補助もあるので、出来るだけ多く採捕、供卵するよう春鱈を秋まで畜養したこともあったが魚が病むことや、経費の負担も大変なことから秋鱈だけで現在に至っている。

今後とも魚体を痛めないウライ漁は必要不可欠であり、多くの釣りファンが楽しみにしているサクラ鱈の一般遊漁化実現のため、一致団結、皆で頑張ってください。



清流新谷川は、サクラ鱈の宝庫だった...

密漁特別監視から

(ホランティア活動) 報告/藤田増殖委員長

*監視期間(3/8~4/末)
 ※地区組合では、1月半ばより実施。
 *監視カ所(横越床固め・渡場床固め)
 *時間(午前6時~9時/午後3時~6時)
 *延べホランティア(214人)

近年における春鱈の密漁は増加の一途を辿っており、地元だけの監視には限度があり本組合の事業として行いました。

◇横越地区では一月半ばより初め、遊漁者は二十人ほどでしたが、二月には五十八名を確認しました。二十二日には、釣り上げた鱈を放置してあり、警察に通報し、ちよっとした騒ぎになりました。三月に入ると釣れるのか、更に増え百六十人を数えました。

◇四月に入ると三月の凡そ半数に減り、特に横越床固めでは三、四人程度でした。

※監視期間中遊漁者からも意見を戴きました。又、ルアーに対する認識が組合員間でも違うことが分かりました。今後の課題として取組まなくてはなりません。



密漁者が放置した桜鱈 2/22

アユかわら版

「アユの性格」

◆「琵琶湖産」は、友釣りに適していると言われ、国内各地に出荷されています。湖産アユは大アユになって川を遡上するグループと湖内に残って小アユになるグループに分かれますが、このグループは世代が変わることに交代しているという説があります。

◆「海産」系のアユの縄張りを持つ性格は、湖産系よりも強くなく、追いが悪いと言われています。成熟が遅く産卵の時期も遅く、そのため七月を過ぎないと釣れないのが特徴だと言われています。

◆「人工/群馬」系は、追いが悪く群れていても釣れないと言った性格が多いようですが、群馬県アユは三十四年にわたって継代し、追いの強いアユを選抜してきたため湖産アユよりも追いが良いと言われています。

※これらの性格が天然アユとの交配によりどのように伝わり、継承されるのか解明が待たれます。